



新しい地震学を目指して

3・11から時間が経つにつれ、被災した方々の生活が取り戻されずにいる一方、例えば東京などに暮らしていると、その生々しい記憶がだんだんと薄れつつあるのも事実だろう。そのような中、あの地震をきっかけに地震学を学びたいと思うようになった人もいるようだし、すでに地震学に関わっていた人々の中にも、新しい地震学を目指す動きも生まれている。東京大学地震研究所助教の大木聖子さんについて、新聞記事から紹介しよう。

＊

高校生の時、テレビで阪神大震災の様子を見て、地震学者を志したという大木さん。大学院では物理の理論と数学を駆使し、地球内部の構造や地震のメカニズムの解明を目指す研究に没頭した。そんな彼女の転機となったのが、2004年に起きた新潟県中越地震だ。

「研究室のなかで何もできない自分に、無力感とはがゆさを感じました。学者など目指すのはやめてボランティアをしたほうがいいのか、と本気で悩みました」

そんな彼女を思いとどめたのが、余震で一人の女の子が亡くなったことを伝える新聞記事だった。大地震の後には余震があり、その危険性も本震並みに大きい。そんな地震学では当たり前のことが、社会には伝わっていないのではないか、と感じた。

「これまでの地震学者は地球のほうばかり向いていたのではないかと。地震による犠牲者を減らすには、もっと学者が積極的に社会に向けて情報発信すべきなのではないか。せめて自分は、人間のほうを向いた地震学者になろう、と思ったんです」

それから、科学研究を一般に分かりやすく伝えるアウトリーチ活動に力を入れるようになる。やがて多くの人が抱いている地震学への過剰な期待と誤解を解消することが大事だ、と思うようになる。

「一つ一つの地震は複雑な要素がからむ1回限りのできごと。科学研究の基本である実験もできません。地震の予知はみなさんが思っているよりはるかに難しいんです。地震の予知に期待するより、地震は常に起こることを前提に、被害を少なくするための行動を起こすことがまず大事だと思います」

そのような考えから、防災教育や避難訓練に積極的に関わるようになった。その矢先に起こったのが、東日本大震災だった。

地震学者への風当たりは一気に強まり、大木さんにも数々の非難・中傷の電話やメールが届いた。なかには理不尽なものもあったが、彼女はすべて真摯に受け止めた。

「私自身、東北の子供たちに地震に関して教える機会があったのに、津波警報が出たら何をおいても絶対逃げるよう、強く訴えてはいなかった」

その悔しい思いも、大木さんの大きな原動力になっているのだろう。「自分には地震による犠牲者をゼロに近づける責任がある」。そう覚悟を決めた彼女が、今、力を入れているのが子供への防災教育だ。（中略）

「私が最終的に目指しているのは、家や街、地域の絆、人々の思い出や家族の愛まで含め、社会全体を丸ごと扱う地震学です」

大木さんの挑戦は今、始まったばかりだ。
(1月7日の朝日新聞朝刊より)